阪神高齢者・障害者支援ネットワーク　ニューズレター第１７号
（略称　支援ネットワーク）
発行　1996年7月15日
発行人
中島久矩　中辻直行　梁勝則
編　集　秦なつみ

ひろば

事務局　〒653
神戸市長田区北町3-3
高齢者ケアセンター長田内
TEL 078-531-8394
FAX 078-575-8188

仮設の支援から１年が経ちました

昨年の６月15日に最大規模の仮設住宅である西神第７仮設住宅にテントを設営し、支援をはじめて１年が経過しました。試行錯誤のこの１年間を責任者の黒田さんに語ってもらいました。



黒田裕子

私たちがここでつくってきたものは、コミュニティーやね。コミュニティーがなかったらここでの生活は成り立たない。ふれあい喫茶をつくったり、活動を通じてボランティアと住民はもちろん住民同士のコミュニィティーができた。でもこれからも住民同士のコミュニティーづくりを続けていかないことには、ここに残る人達がまだまだいるし、特に弱者の人達が残るから。元気な住民の人に「あの人に目を向けて欲しい」と言っていく。そういうコミュニティーづくりのなかから住民の人達の安全を守っていきたいというのが今後の目的。住民同士の自立したコミュニティーづくりが大切。

被災者の視点にたって見ていると日々刻々と変わるニーズが本当によく分かる。だから日々が勉強。私たち自身も感性を磨いていかないといけないし、感性を磨かせられるという感じ。今考えていることは、アルコール依存の人、家に閉じこもっている人たちのためのデイケアを行い、コミュニケーションを図り、外へ目を向けることを促すこと。またわずかでもの収入に、そして今を生ききるために、仕事もなく家の中でぼーっとテレビを見ているような元気なお年寄りや若い人に、職業訓練所のようなものができたらいいと思う。その人自身の自分への動機付けのためにも。

私たちの役割というのは、１年を通してまんべんなく生活が安定できるように持っていくということ。そういうなかで安定剤になっていくためにボランティアはここにいるのだと、１年間の活動を通して学びました。

全国の皆さんへのメッセージ

私たちは常に１月17日を原点におきながら活動を続けています。そしてここで「共生」をしてきたと。仮設がある限りは、今後も皆さん一人一人が震災を忘れないでいて下さい。そして皆さんが同じ気持ちになって支えていって欲しい、まだまだ援助を必要としている人がたくさんいらっしゃいます。ここへきて直接援助しなくても、側面からできることもあるんです。

ボランティアと住民　1年の歩み

仮設住宅の支援が今に至るまでには、多くの人々の直接、間接的な参加がありました。そして各々が震災のことを考え、お年寄りや障害のある人を知り、自分自身を考える契機になったのではないでしょうか。単に「支援をした」にとどまらない何かがここにあるのかもしれません。

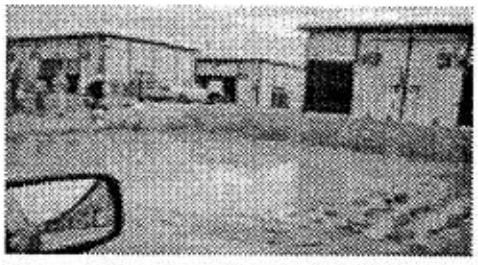
黒田裕子とカルロス（専従ボランティア）のこの1年

活動概要

1995年	
5月	第7仮設に初めて訪れる
6月	テント設営
	WOAボランティアと合流
	自治会結成集会
10月	ふれあいセンター完成
	テント撤収
12月	クリスマスイベント
1996年	
1月	ふれあい喫茶オープン
3月	常駐ボランティア解散
4月	新体制で活動開始



テントでの自治会結成集会



建設当初の仮設の光景

最初にここに来たときはちょうど梅雨で湖みたいになっていて、出歩いてる人もぽつぽつとしかいない、隔離されたような感じで「殺風景なとこやなぁ」と思った。全然人が住んでいないかと思ったら、暗くなると部屋に明かりはついてる。「出歩かない、というより出歩けないんだな」と感じた。正直言って最初は何をやっていいのか分からなかった。どうしらいいのかと。

テントは野外キャンプのようだった。ギターおじさんに、酔っぱらいのおっちゃん、いろんな人が毎日きて楽しかった。

（カルロス・談）

最初の頃は日常生活におけるニーズが多かった。例えば長田に住んでいた人は以前は家に鍵をかけていなかったが、住み慣れた街を離れたこの仮設では鍵を掛けて出なければならなくなり、「鍵を落とした、鍵の掛け方が分からない。」という人が続出、迷子になる人も多かった。

住民の40%くらいは心身障害のある方。最初は難しかった行政との関係も、今では合同でミーティングを持つまでになった。障害のある方は行政につなぎ、タイアップして支援をしている。

（黒田・談）



クリスマスイベント

今の印象

住民の人が明るくて、全体的に穏やかになった。よく出歩いてるし、畑づくり、井戸端会議もやってる。近所の人の悪口聞いたりすると「慣れてきたんだなあ」と思う。

ほっとってもこういう雰囲気になったと思うけど、ボランティアがいたことで少しは落ちつく時期を早めたのかもしれない。



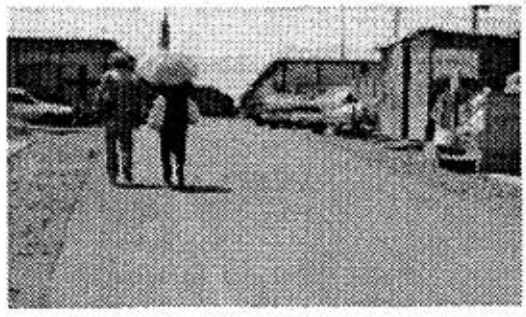
カルロス（本名：石田）

自分にとってここの住民は近所の人という感じ。自分も住民の一人という気がするし。ここへ来るまえは、「じいちゃんばあちゃんとは、絶対に話があわない」と思ってた。そしたら意外とそうでもないことにけっこう驚いた。みんなほんとに友達みたいな感じやわ。

今のニーズを探すことは結構難しい。最初の内は「なんでもやっちゃえ」って感じだったから。今は「どこまでやっていいか」という葛藤がある。やっちゃいけないかな、でも頼まれるとついついやっちゃう。

ボランティア

40名ほどの地元ボランティアさんが活動している。主婦の方が多いが、定年後のおじさんが高齢の女性の独居のひとの生活援助をしている。ちょっとした大工仕事もしてくれる。また住民の75才のおばあちゃんが、ボランティアのボランティアや喫茶店を手伝ってくれている。「家におったらいろんなことを考えてしまうけど、ここにいたら忙しいから考える暇がない。心がなごみ１日が非常に充実して短い」と言ってくれた。



アスファルトの敷かれた仮設内の道路



立ち話

今の状況

１年前に比べるとずいぶん良くはなったと思う。ただここにも年収０円の人が居る。ほんとにいつも100円あるかないかの人。そういう人に生活保護のことを勧めても「、ご飯を食べれなくなっても、人様の世話にはなりたくない、」とおっしゃります。自分で畑を作って生活し、たまに日雇いの仕事をしたり。でも仕事もあるかないか。そういう低所得の人が多いんです。まだまだ大変な問題がたくさんあるんです。（黒田）

ふれあい喫茶の日々

ふれあい喫茶は相変わらずの賑わい。馴染みの顔が「おはようさん」と入ってくる。見慣れないボランティアに「あんた新顔だね」と気軽に声をかけてくる。

もの静かに本を読み耽っている人。昔話に花を咲かせ、懐かしの歌を披露する人。ボランティアに青春時代や戦争の話を訥々と語ってくれる。戦後世代の私たちは、深くしわを刻んだ顔を見ながら「生の歴史を」を聞くことができる。机の上での勉強に慣れてしまっている私にとっては新鮮で、直接胸に響いてくる。

昔の友にばったり出会うふれあい喫茶。ここで戦友に出会った人もいたという。震災前のご近所さんに出会う。新しい顔に出会う。ふれあい喫茶はいつも「人」が主役。

照れくさそうに「70才で初恋はおかしいかな」と尋ねるおじいちゃん。聞けば避難所で素敵な人を見つけたという。「初恋？結婚したときは」と思わず聞き返した。「見合い結婚だったから・・」と。「70才で初恋」という言葉に思わずこちらもにんまりとしてしまった。

地元ボランティアの声



長田区に住むボランティアの井本さんは、震災前には薬屋を営んでいた。店はつぶれ、今は区内の息子と一緒に暮らす。「多少でも役に立てば」と喫茶のボランティアを始めた。「ここへ来ると商売してたころの知り合いに会い、『もしかしてもみじ薬局さんですか？』などと声をかけられます。ここでは住民のみなさんに励まされているんです。」と嬉しそうに話す。

西区に住む門口さん。「いろんな話を聞いて、つくづく私は世間知らずだなあと思わされる。これからも長期戦でがんばります。」

喫茶店は癒しの場



「喫茶ができてから、閉じこもりもだいぶ少なくなったんです。なるべく家から引っぱり出すようにもしているし。目的達成ができたかな、と思う。」と黒田さんは嬉しそう。

いま、お酒をやめてもらっている人がいますが、雨の日に「一人で家にこもってたらなんかむなしくなってきた」といって喫茶に来てくれました。痴呆のお年寄りや知的障害の住民の方も喫茶にくるようになりました。40才の知的障害を持つ子供の世話をしている80才のおばあちゃんも、親子で喫茶に来てくれるようになりました。喫茶店で知り合った70代のおじいちゃんとおばあちゃんが、最近連れ添って喫茶に来たり、長田に行ったりしているので、「結婚したらいいのに」って冗談でいってるんです。

黒田さんは帰る人に「明日もきてね。毎日お顔を見ないと寂しいわぁ。」とまめに声をかけている。

神戸から全国へ・全国から神戸へ

「介護保険」法案が10月の臨時国会に提出されることになりそうです。お年寄りの長期介護を地域をベースに展開するこの構想が実現すれば、21世紀の日本の社会は大きく変わります。介護保険問題に取り組んできた岡本さんのこの一文は、大阪の朝日新聞に掲載されたもの（「臨床医の目」）を再録しました。

災害が社会を解剖する

薬の卸し屋さんという職業がある。薬品を診療所や病院の注文に応じて、製薬会社から仲買して届ける仕事で、医療界の流通業者である。今回の震災でも怪我をしたり病気が悪化した方々が多数で足し、薬品倉庫が潰れて使えなくなったりしたから、薬品を悪事をおかして医療施設へ緊急配達するのに苦心惨憺だったそうだ。何しろ大量の注文が一度に出たために、阪神間の業者の在庫だけでは間に合わず、各地の同業者に応援以来が飛んだ。

筆者の知人で九州の卸屋さんから最近電話があった。彼のところにも応援要請があり、社員のボランティア部隊を何人も派遣したという。そしてこう質問してきた。「先生、一番注文の多かったのはどんな薬品だと思いますか？」と。「さあ。けがをした人が沢山いたから、やっぱり化膿の治療や予防のための抗生物質かな」と私。「そう思うでしょう。ところが違うんです。心臓病や高血圧なんかの循環器系の慢性疾患用の薬なんですよ。いやぁ高齢化社会なんだなと、社員一同あらためて実感しましたよ」と彼。

戦後の一時期猛威をふるった結核や肺炎、赤痢などの感染症がほぼ制圧された後、わが国の疾病構造はいわゆる成人病院一慢性疾患中心になった。高齢化が進むと、ますますこういう病気を患い、常時医薬品を必要とする人々が飛躍的に増える。そして震災での応急手当の済んだ後、高齢者で病気持ちの人々が多数、避難所のひどい環境の中や倒壊した家に放置され、治療もうけられず日々に衰弱し、中には死に至る方が続々と出ていると伝えられる。社会の病気の構造変化のもとで、どのような人々がもっとも弱い存在であるか、どの社会サービスが日頃から不十分であるかを、この災害がはしなくもはっきりと暴き出したことになる。大きな災害が起こると、医療や福祉の援助で何とか生活していた人々が、たちまち最悪の危機に瀕する。医療や社会福祉制度が日頃から不十分であったり、ギリギリのレベルの援助しか提供されていないと、こういう時に社会サービスの助けがないと生存をおびやかされる市民にもっともしわよせがくる。

19世紀の有名な医学者が「病気が人体を解剖する」という名言を残した。病気でなくなった人を解剖すると、たとえば内分泌ーホルモン系の病気にかかった人だと、そのホルモンが作用している臓器や器官が系統的に侵されるから、普通は見えないようなホルモンの作用がはっきりと肉眼的に浮かび上がってくるのである。災害が日頃は見えない社会の弱点を浮かび上がらせる。先の名言にならえば、「災害が社会を解剖する」のである。

岡本祐三（神戸市立看護大学教授）

被災地の動き

神戸新聞より

災害復興公営住宅　最低家賃６千円台に

神戸市・市街地の1DKに単身者が入居した場合

各種控除後の年間所得	自己負担家賃
90万円台以下	6,000～7,000円
100万円台	11,000～20,000円
200万円台	22,000～27,000円
300万円台	31,000～36,000円

政府の阪神・淡路復興対策本部は、震災被災者対象の住宅供給、家賃低減の総合プログラムを正式決定した。神戸、阪神間を中心に公営住宅を３万８千６百戸供給し、都市部でも高齢者層の１DK住宅の月額家賃を「最低６千円台」まで引き下げる内容で、低減期間は当面５カ年。1998年度上期には、仮設住宅から公営住宅を希望する被災者がすべて入居することを目標にしている。公営住宅の家賃低減に国費を投入するのは初めて。厚生省など関係各省も低所得者向けの特別賃付金創設などを打ち出した。３万８千６百戸は、仮設住宅から公営住宅に移る世帯を２万１千世帯とし、仮設住宅以外から１万百世帯、その他県外避難者、潜在希望者を７千５百世帯と見込み、必要戸数と試算したもの。

仮設からの退去が進み、少数世帯だけが残り、コミュニティーが維持できないと判断した場合は、仮設間の転居を容認する他、恒久住宅への優先入居も検討する。

高齢者の支援策としては、生活援助員を派遣し、日常生活を支えるシルバーハウジングを計３千２百戸整備。地域福祉やボランティア活動の拠点となるコミュニティープラザを災害復興公営住宅のなかに35カ所設ける。さらに共同生活で高齢者世帯のコミュニティーづくりを促進するコレクティブハウジングを、モデル的に新設する。県の仮設住宅調査では、高齢者世帯が約42%を占め、公営住宅への移転後も、安心して暮らせるハード、ソフト両面での体制づくりが急がれていた。

「第２回障害者政策研究全国集会」・神戸市で開催

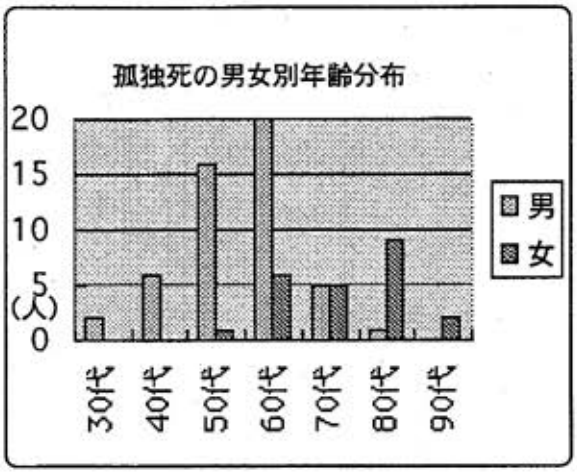
障害者自身で政策を考え、行政などに働きかけていく「第２回障害者政策研究全国集会」が、11月30日、12月1日の二日間、神戸市北区の「しあわせの村」で開かれる。今回は被災地の現状から障害者政策を問い直す狙いで神戸開催となった。全体会のテーマは昨年末に国が打ち出した「障害者プラン」。自立生活、まちづくり、教育、若者、労働・作業所の５分科会が行われる。また「第３回知的障害者全国交流集会」が「しあわせの村」で同時開催される。実行委員はボランティアスタッフや募金を呼び掛けている。

問い合わせ先　「被災地障害者センター」 ☎078-672-0845

【鷹取アジア村】・９月スタート

神戸市長田区・鷹取東地区の一画に、アジア各国の料理や民芸品などが楽しめる「鷹取アジア村（仮称）」が９月初旬にもオープンする見通し。定住外国人が多い長田の特性を生かした計画。アジア各国の「食」を中心に、巨大テント内に12店舗を収容する構想。

壮年男性の悲哀



被災者の孤独死は、昨年３月から今年６月末までに74人に上り、（県社会保障推進協議会の調査）自殺者を含めると100人を超える。男性の死者は女性の２倍で、60～50才代の壮年層が半数を超える。（左図参照）同協議会はアルコール依存症やストレスとの関係をあらためて指摘、公的保障など早急な対応を求めている。

また中央社会保障推進協議会などが行った仮設住宅の調査によると、震災後の健康状態では、40～50才代の居住者の６割が、「震災前より悪くなった」と回答。他の年齢層より高い率を示した。この年代で失業中と答えた人は25%。「病気で働いていない」が14%。失業率は60才代15%、40才未満10%より高かった。また50才代の32%が「生活保護の適用」を求めた。

同協議会は結果を報告集「被災者が問いかける日本の社会保障」にまとめ、29日に東京でｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑを開く。　問い合わせ先　☎03-3368-3477

慢性疾患の悪化深刻

東加古川団地仮設（千戸）で、死亡者が他の仮設を上回り、12日に１人のペースに上っていることが分かった。昨年４月入居からすでに36人。死因はがんや循環器系疾患が目立ち、65才未満でも13人。救急車の出動も113件で、今年になって急増している。同仮設の入居者の大半は神戸からの入居。市の保健婦は「医療費の本人負担分免除の特例が打ち切られ、神戸の掛かりつけ医に行くのをやめた人も多い。高血圧や糖尿病の慢性疾患が悪化しているのが心配」と言う。

事務局から

下記の方は義援金口座に送金を頂きましたが、住所がわかりません。よろしければ事務局の島本までご住所等をお知らせ下さい。また会員希望の方で、間違って義援金の口座に会費を振り込まれている場合には、お早めにお知らせください。

（敬称略）

オオハタマサミ　カワキタヨシアキ　シオツキシュウヘイ　カジモトテルコ　ツツイアキオ　カドクラツギオ　澤田井雄一　高橋扶美　ミカミアツシ　フジイノリオ　コンドウアツシ　タカギユリコ　クサヤナギクニヒロ　アリタケシンスケ　イワサワノブエ　栗原新一　ソウカヒガシコウダイ13回生　ヤマモトユミコ　寺出直子　ババマサヨシ　コンナイヒサカツ　スガヌママサコ　ワタナベダイキチ　イワミムツコ　ヤジヒロコ　ノムラシンタロウ　ミネユウジ　高橋美輝　ツノケンドウ

お知らせ

会費についてのご案内

支援ネットは会員制になります。ひろばは次号より会員の方への送付に切り替わります。会員をご希望される方は、お手数ですが下記郵便口座まで会費の振り込みをお願いします。尚、会費の有効期限は平成9年3月末日までとさせて頂きますのでご検討のほどよろしくお願いします。

郵便振替口座

口座番号　　０１１３０－９－８８８３３

名義　　阪神高齢者障害者支援ネットワーク

会費

個人会員：　正会員　一口　5000円　　準会員　一口　3000円

団体会員：　正会員　一口 10000円　　賛助会員　一口 10000円

・会則ご希望の方は、事務局までご連絡下さい（ひろば１５号に掲載済）。

・会費については、必ず上記口座にお願いいたします。

義援金ありがとうございました

敬称略　順不同　平成8年　6月18日現在

フォルクルチャリティカップ　オオハタマサミ　カワキタヨシアキ　シオツキシュウヘイ　カジモトテルコ　ツツイアキオ　カドクラツギオ　澤田井雄一　高橋扶美　ミカミアツシ　大倉正臣　フジイノリオ　　コンドウアツシ　タカギユリコ　クサヤナギクニヒロ　アリタケシンスケ　栗原新一　イワサワノブエ　ソウカヒガシコウダイ13回生　ヤマモトユミコ　パパマサヨシ　富士火災海上保険株式会社　羽賀神経内科　ソニー生命保険株式会社　鈴木ピイコ　三戸峰代　須藤恵子　寺出直子　コンナイヒサカツ　大内正男　スガヌママサコ　ワタナベダイキチ　能見昌枝　イワミムツコ　ヤジヒロコ　ノムラシンタロウ　小林正孝　三川賢悟　ミネユウジ　佐々木千鶴子　安芸幸　石井初男　黒田裕子　みどり内科クリニック　高橋美輝　吉沢真二　ツノケンドウ

振り込み口座は

郵便預金　１４３９０　４９５３７４１１

名義　神戸長田高齢者障害者支援ネットワーク　会計　近藤純江

（ｺｳﾍﾞﾅｶﾞﾀｺｳﾚｲｼｬｼｮｳｶﾞｲｼｬｼｴﾝﾈｯﾄﾜｰｸ）

※この口座は「義援金」の振込先です。この口座に振り込んだ場合、住所等の確認がとれません。また間違って振り込まれた場合は、事務局までご必ず連絡下さい。